

日本イギリス哲学会関東部会第 86 回例会

日時 2010 年 12 月 11 日（土）14:00～17:15

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 西校舎 514 教室

プログラム

14:00～15:30

恐怖と意見

—エドモンド・バークの統治様式論—

高橋 和則（中央大学）

15:45～17:15

欲求実現と時間

—幸福（福利）に関する欲求実現説の吟味—

成田 和信（慶應義塾大学）

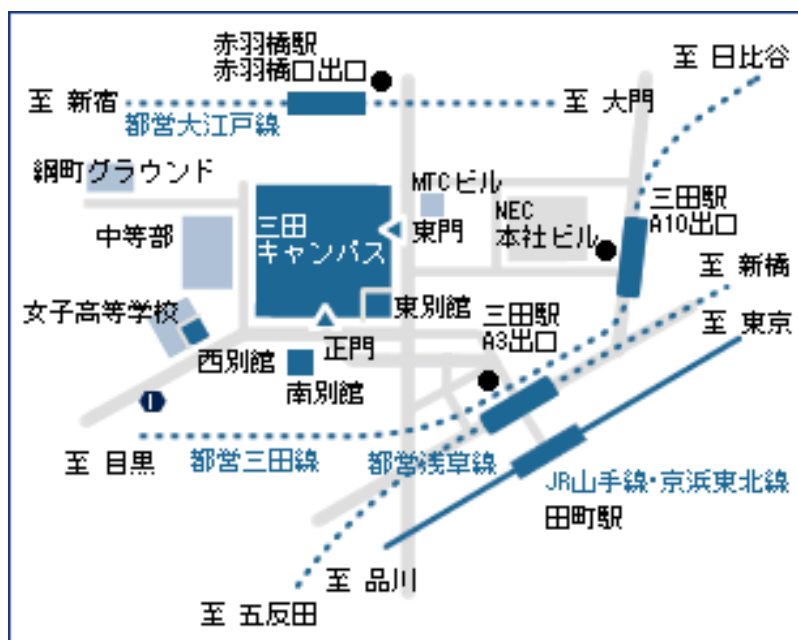
関東部会担当

坂本達哉（saka◎econ.keio.ac.jp）

柘植尚則（tsuge◎flet.keio.ac.jp）

◎を@に置き換えてください。

【会場案内】

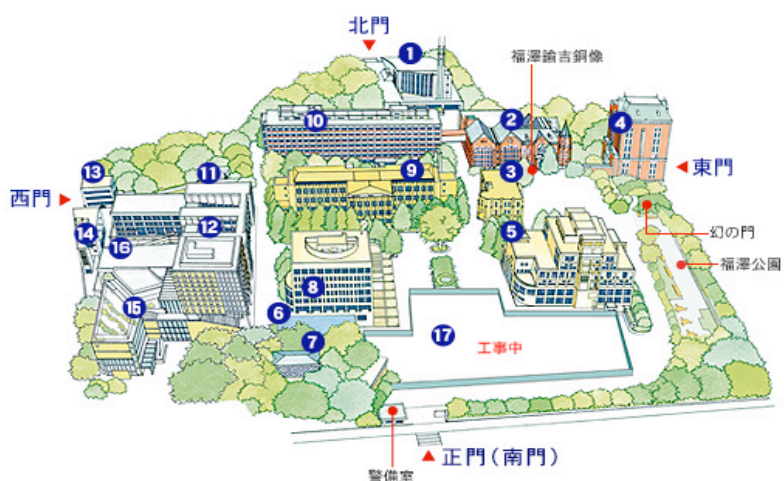


108-8345 東京都港区三田 2-15-45

JR 山手線・京浜東北線 田町駅下車、徒歩 8 分

都営地下鉄浅草線・三田線 三田駅下車、徒歩 7 分

都営地下鉄大江戸線 赤羽橋下車、徒歩 8 分



西校舎は⑪の建物です

日本イギリス哲学会関東部会第 86 回例会（2010 年 12 月 11 日、慶應義塾大学）

【報告要旨】

恐怖と意見

—エドモンド・バークの統治様式論—

高橋 和則

本報告の目的はエドモンド・バークの政治思想を、統治様式の視点から明らかにすることである。このことはバークが革命フランスの何を批判したのかということに強く関連する。バークはアメリカ革命を擁護しつつフランス革命を批判するという一見矛盾した議論を展開したかに考えられ、議論の基礎に大きな揺らぎがあるように論じられたが、例えば統治様式についての思考には一つの一貫性が認められる。これらは、フランス革命を契機として表明されたため、フランス革命がいかなるものなのか、という文脈の中で表現されているのである。

本報告ではまず、バークが政体に関して依拠していた枠組みがアリストテレスのそれであることを確認する。アリストテレスの『政治学』における「民主制」論、とりわけそれと「僭主制」との連関を論じた部分が、バークのフランス革命の把握に際して基礎的な議論になっていることを論ずる。

次に統治様式が、文明社会に至るヨーロッパの歴史の中で考察されており、恐怖に依拠する様式から意見に依拠する様式へと論理化されたと認識していることを検討する。バークはヨーロッパが粗野な中世から初期近代から文明社会化したと捉えており、それを（騎士道から貴族の精神、紳士の精神へという）作法などの変化から理解している。この理解に基づいて、統治様式もその変化に対応していると論じている。それが、絶対君主制に代表されるような恐怖によって支配する様式から、より穏和な、支配が意見に支えられる様式への変化であるといっていよい。フランス革命が批判されるべきなのは、この変化を破壊するものであると思われるためとされる。合わせてバークの一見機会主義的に見える議論はこうした基礎的な議論に依拠していたことを確認したい。

欲求実現と時間

—幸福（福利）に関する欲求実現説の吟味—

成田 和信

この報告では、幸福（福利）に関する欲求実現（充足）説を吟味する。欲求実現説とは「幸福は欲求の実現によって構成される」という説である。この説は、R.M. Hare, John

Rawls, James Griffin などによって採用されている。

欲求実現説にはいくつかの難点がある。この報告では、欲求とその対象の時間的なずれから生ずる難点を取りあげる。我われは、過去や現在の事柄ばかりでなく、未来の事柄に関しても欲求をいだく。たとえば私は「定年退職後は、ギターの練習に専念したい」と思っている。だが、定年退職後に私がギターに対する興味をまったく失った場合に、にもかかわらずギターを練習することは私の幸福につながるであろうか。私には「つながらない」としか思えない。

さて、この私の考えが正しいとすれば、それは欲求実現説に打撃を与えるであろうか。この報告では、Derek Parfit の *Reasons and Persons* の Chap.8, Sec. 59-60 (pp. 147-158) で展開されている議論を手引きにして、この問題を考えてみたい。

「定年退職後は、ギターの練習に専念したい」という私の欲求が Parfit の言う「自らの存続に依存する欲求」である場合には打撃を与えない、と私は考える。というのは、Kris McDaniel と Ben Bradley が論文 *Desires* (*Mind*, Vol. 117, 2008) で説明しているように、その場合には私の欲求は実現しているとは言えないからである。だが、「自らの存続に依存する欲求」でない場合には打撃を与える、と私は考える。というのは、その場合には、上の例は、欲求が実現しているのに幸福にはならない例になるからである。今のところ、私はこのことを直観に訴える仕方では示すことができないが、報告の際には、その直観を支えるような議論が少しでも展開できればと思っている。